



走る



機里

どこにでもある、ごく普通の田舎町。ごく普通の家で、親子喧嘩が起こっていた。

「何度同じことを言わせるの！ この前、分かったって言ったでしょ！？」

「うん」

「じゃあ、何で約束を破ったの！？」

鬼気迫る勢いで怒鳴る母親に対して、少年は酷く冷静だった。少年は応えない。

「黙っていたら、分からないでしょ！？」

少年は、母親の顔を真摯に見つめたまま、それでも応えない。

「カイト！」

長い沈黙の後、少年は何かを決心した風に重く閉ざしていた口を開いた。

「母さんの言うことも分かる。けど、約束を破ってでもやらなきゃならないことだったんだ」

少年は、早口な母親とは対照的に落ち着いた口調でそう答えた。

「ああ、もう、あなたの考えてることがわからない！」

(何で分かってくれないんだよ。話を聞いてくれないんだよ)

少年は落胆した面持ちで、心の中でそう呟いた。

いつもそうだった。少年と母親との間には、いつも一枚、壁があるかのように隔たっていた。今、少年の気持ちが分からないと言った母親と同じように、少年もまた、どうして分かってもらえないのか、と思っていた。

結局、少年と母親は分かり合いたいと思っているのに、どうやって分かり合えばいいのかが分からない、不器用な人間同士だったのだ。そして、今夜も、母親の怒りが収まるまで、平行線の親子喧嘩は続いた。

親子喧嘩は終り、少年は、酷く疲れていた。身体ではなく、心が。話が交わらない相手と話し続けることは、想像以上に精神をすり減らし去っていく。それが、一番分かって欲しいと思う相手、母親となるとその疲労は大きなものだった。

少年は分かって欲しいと、だったらどうしたらいいのかと、思い悩みながら言葉を発し続けた。自分の母親なのだから、いつかは分かってくれる。もっと頑張れば、いつかは分かってくれる筈だと、願っていた。そうやって、少年は今、とても疲れていた。

思考は疲れて、まともな考えが浮かばないというのに、先程までのことが否応なく頭の中に浮かんでくる。だから、少年はいつものように、両親に一言だけ声をかけて、家を出た。

持ち物は、電源を切った携帯電話だけ。今の季節は夏。夜でも湿度は高く、じっとりと粘つく空気が、不快感を生む、そんな日だった。

少年は、そんなことを気にもかけない。ただ黙々と、靴ひもをきつく結ぶ。少年は顔を上げる。その視線の先には、雲の切れ間からキラキラとした星と、満月が少しだけ覗いていた。それから少年は、ずっと目を閉じる。その行為は、少年がずっと昔からしている、儀式のようなものだ。

目を開く、その瞬間、少年は走り出した。

軽快な速度で足を前へ前へと伸ばす。スポーツマンでない少年には、些か速いスピード。

少年は、すぐに呼吸を荒げ、何度も立ち止まり、息が整う度に、また走る。その単純で、苦しい行為を、少年は繰り返す。

田舎町の暗い夜。街頭は存在しない。少年を照らすものは、雲の切れ間から心細い光を発する、星と月。少年は全身全霊で走る。終電が終わってしまった安全な線路を渡り、田舎町には似合わない幅の広い二車線の道路を横切り、街頭もなく月の光も届かない脇道を駆け抜ける。

繰り返す度に、息の乱れは激しさを増していく。走れる距離は短くなっていく。もう少年の耳に聞こえてくるのは、自分の無様な呼吸音だけ。

少年はいつも、嫌なことがある度、こうして走った。いつからだったのか、そんなことも忘れてしまうくらい前から、少年は走ることを好んでいた。走っているその間だけは、どんな辛いことも悲しいことも苦しいことも忘れられることを少年は知っていた。

しかし、それだけだったわけではない。不規則になればなるほど乱れる呼吸音が、自分がこの世に生きているのだと実感させてくれる。まとわりつき、張り付き、流れる汗の不快感に、自分が溶けていく気がする。歩いているのとは違うスピードが、景色を霞ませ、現実を霞ませる。風を切る自分が、一個の獣のように感じる。

走ることで感じる全ての感覚が、少年を走らせる要因だった。

脇道を抜ける。どこか涼しい空気が流れる古墳の横を通り抜け、住宅街の間を縫っていく。駅前の閑散とした駐車を横目に捉え、なお走る。

もう、汗はだくだくと流れ、息はまともに酸素を体に供給できないでいる。それでも少年は走り続ける。少年は、止まらない。自分が決めたゴールに辿り着くまで、少年は止まらない。

少年はやっとのことで、ゴールに辿り着いた。その場所は、ごく普通の民家だった。

少年はその家の玄関を穏やかに見つめる。車庫の片隅には小さく丸まって眠る犬がいる。

そんな光景を眺めながら、少年はひたすらに、息が整うのを待ち続ける。

血液は狂ったように滾っていて、なかなか治まらない。少年は、静かに、穏やかに、待つ。そうして、ようやく息は整った。

少年は、自然な動作でポケットから携帯電話を取り出して、電源を入れる。アドレス帳から大切な名前を検索して、電話をかけた。無機質な電子音が数回続いて、前置きもなく声が発せられた。

「今日は、どうしたの？」

「うん、ちょっとな。今、お前ん家の前に居るんだけど、いいか？」

「はいはい」

少年は、目の前の民家に住む少女に電話を掛けた。少女は、理由を聞かずとも、少年の状態が分かっていた。

しばらく経って、玄関に明かりが灯り、少女が面倒臭そうな顔で現れた。

「夜遅くにごめんな」

「ほんと、今何時だと思ってるの？」

携帯のディスプレイに映る時刻は、深夜をわずかに回っていた。

「それより、はい」

少女は言いながら、コップ一杯の水を差し出す。少年は少し驚きながら、それを手に取り、一息に飲み干した。

「どうして、わかったんだ？」

空になったコップを返しながら、少年は訊ねた。

「だって、これで何回目だと思うの？ 私だってそろそろわかる。カイトがこんな時間に電話をかけてくることなんて滅多にないんだから」

「ああ、そっか」

「それで？ 今日はどうしたの？」

「えっと……うん」

少年は言葉に詰まった。

本当は、さっきまで心の中で渦巻いていた様々な想いを聞いて欲しかったのだが、今ではとりわけ話す必要もないと感じていた。

「また、言いたいことなくなった？」

少年は、全てを見透かされていることに苦笑した。少女は、少年のその表情を見て、温かい笑顔を浮かべる。

それから、少年は、少しだけ両親との喧嘩のことを話し、話すことがなくなると、少しの間だけ他愛もないことを話して、笑い合った。

「それじゃ、おやすみ」

話すこともなくなると、少年は少女に別れを告げた。

「おやすみ」

少女の言葉を聞いて、また走りだそうとして、少年は一つ、とても大切なことを言い忘れていたことに気が付いた。

「ナミ」

少女の名前を呼ぶ。

「なに？」

「俺、お前の前だと、何かなんでも素直に喋れる。

ありがとう」

少女は、戸惑うように視線を泳がせてから、

「カイトはずるい。何でそんな恥ずかしいことを真っ直ぐ伝えるかな」

と言いながら、照れていた。

ああ、その顔が見たかったのかもしれない、と少年は思った。

「それじゃ、またな」

「バイバイ」

お互いに手を振ってから、少年はまた、夜の田舎町を走りだした。

走りながら、少年は無意識に空を見上げる。

さっきまでの雲はどこに消えたのか、空には満天の星空が広がっていた。

暗いだけだった筈の夜は、少しだけ明るかった。